



KANSAI
UNIVERSITY

教職支援センター年報

2025

関西大学 教育推進部
教職支援センター

『教職支援センター年報 2025』 目次

投稿原稿

<研究論文>

2015年から2025年にかけての日本における教師教育者を主題とする研究の動向

関西大学総合情報学部	教授	小柳 和喜雄	
横浜国立大学教育学研究科	教授	野中 陽一	
四天王寺大学教育学部	教授	木原 俊行	1

教職課程担当教員の力量形成としてのチェンジラボラトリー:

形式的介入者の拡張的学習と〈ケアの規則〉をめぐる教育原理的基礎づけ

関西大学文学部	准教授	山田 直之	13
---------	-----	-------	----

<実践報告>

人間形成の可能性——教科教育という契機

関西大学	非常勤講師	榎井 英人	23
------	-------	-------	----

<ショートレポート>

国語科単元学習の中に位置づける読書指導の必要性

関西大学第一中学校	教諭	秋吉 和紀	34
-----------	----	-------	----

生きる力を育む「総合的な学習の時間」を目指して — 教師になる前に —

関西大学	非常勤講師	喜多 英一	39
------	-------	-------	----

地理歴史科教育法(二)における教材研究としての公開GIS活用

—シアトルID地区の建築年代・建物高さの統合と2D/3D可視化—

関西大学	非常勤講師	柴田 洋一	45
------	-------	-------	----

1. 教員の養成の目標

関西大学教職支援センターの基本理念	51
-------------------	----

2. 教員の養成に係る組織

教員の養成に係る組織	52
教職支援センター規程	54
教職支援センター自己点検・評価委員会規程	58

3. 教員の養成に係る授業科目	
教職に関する専門教育科目担任者一覧	60
4. 教員免許状の取得の状況	
各学部・大学院で取得できる教員免許状の種類・免許教科	65
学部別介護等体験 参加者数	67
学部別中学校・高等学校教育実習生数	68
教員免許状取得状況（学部・大学院）	69
教員免許取得までの諸手続き	75
5. 教員への就職の状況	
【校種別】公立・私立教員採用試験合格者数	76
【学部・研究科別】公立教員採用試験合格者数	77
教員採用選考に係る「大学推薦」の応募・合否結果	78
6. 教員の養成に係る教育の質の向上に係る取組	
「介護等体験 第3回事前指導」	79
「①教育実習事前指導登録ガイダンス」	80
「③教育実習事前指導履修者対象ガイダンス」	82
「⑤教職実践演習（中等）履修者対象教職課程・教員養成フォーラム」	84
教員採用試験合格者との情報交換会	86
教職課題研究会	88
教員採用内定者との懇談会	89
教員採用試験に向けて～支援制度を積極的に活用しよう～	90
教員採用試験 面接対策セミナー実施状況	91
教職ガイダンス日程	92
7. その他	
関西大学教職支援センター年報投稿規程・執筆要領	93

〈ショートレポート〉

国語科単元学習の中に位置づける読書指導の必要性

関西大学第一中学校 教諭 秋吉 和紀

1. 本稿の目的

本稿は、中等教育における読書指導の必要性を再確認し、そうした読書指導を国語科単元学習の中に位置づけることを提案するショートレポートである。その試案として、本校(関西大学第一中学校)で2025年5月に行った教育実習の教壇実習で行った中学1年生の単元学習の概要を提示する。それに先だってまずは、そもそもなぜ本稿の提案に至ったのか、その背景について3つの観点から述べていきたい。

2. 読書指導を行うに至った背景

(1) 本校の文化資本の活用という観点から

稿者は2016年から2022年までの6年間、本校の校務分掌の一つである「図書・情報部」に所属しており、そこで主に図書館運営に関する業務に携わっていた。そこで二つの課題に直面することになる。

第一に書庫の保管状況である。当時、本校の所蔵図書は55,000冊を誇っていたが、その1割から2割程度の本が旧校舎の奥深くにある書庫に保管されていた。しかし、その書庫は謂わば「本の墓場」と化していた。調温・調湿機能がない場所で長年忘れ去られていたというのが正直なところで、その半数近くが戦前かもしくは戦後初期の資料であり、ほこりとカビにまみれたものがあったり、損傷がひどいものがあったりと、学校図書館の所蔵資料としては限界を感じるものばかりであった。本来は適切な時期に適切な手順を経て除籍や放出を行うべきものであるが、それが塩漬けにされている状況にあった。

第二に図書の利用状況である。本校の図書館は他の私立大学附属併設校の図書貸出し状況に比べれば平均的な貸出し状況ではある(例えば2023年度の本校中学生の年間の平均貸出冊数は5.7冊である)。しかし、これも十分な量とは言えない。また、一つ目の課題とも重なるが、本校の図書予算は一般的な学校図書館に比べればかなり潤沢な部類に入るが、除籍されるまでに一度も貸し出された実績がない本や、一度だけ貸し出されただけで除籍される本(図書リクエストをした本人だけが借りた本)が多数見られた。こうした状況を図書館の担当者として経年で確認するうちに、授業計画と連動した選書および図書の利用を行わなければ、貸し出しそのものが増加しないという思いに行き着いたのである。こうした「死蔵」とも呼べるような図書利用の状況を脱却するために、また、本校の豊富な文化資本と学習者とを出会わせるために、国語科単元学習の中に読書指導を位置づけるということの必要性を図書館運営の中で認識したのである。

(2) 「読書離れ」への対処という観点から

昨今の中等教育の学習者の読書状況は悪化の一途を辿っている。特に各種調査が経年変化で示す指標を確認すると、ここ数年の中学生の読書状況の悪化が著しいことが確認できる。そのほか、こうした各種調査は、その問い方にばらつきはあるものの、いわゆる「不読率」に関する質問項目を

必ず挙げていることが興味深い。その各種調査における不読率に関する内容を抽出してまとめたものが【表 1】である。

表1 各種読書調査が示す不読率

調査		年	回答主体	不読率に関する内容
1	東京大学社会科学研究所・ベネッセ教育総合研究所 子どもの生活と学びに関する親子調査2024	2024	生徒	1日の中で読書を「しない」（0分）という回答した中学生の割合は「59.8%」である。
2	文部科学省 国立教育政策研究所 令和7年度 全国学力・学習状況調査	2025	生徒	「学校の授業時間以外に、普段（月曜日から金曜日）、1日当たりどれくらいの時間、読書をしますか（電子書籍の読書も含む。教科書や参考書、漫画や雑誌は除く）」という問いに対して、「全くしない」と回答した中学生の割合は「41.6%」である。
3	全国学校図書館協議会 第70回 学校読書調査	2025	生徒	5月の1ヶ月間に読んだ本が0冊の中学生の割合は「24.2%」である。
4	光村図書 第4回 子どもの「好き」に関するアンケート調査	2025	保護者	「お子さんは、1か月に何冊ぐらい本を読んでいますか」という問いに対して、「読まない」と回答した中学生の保護者は「41.2%」である。

かねてより小・中・高と学校段階が上がるごとに平均読書冊数が落ち込むことは、学校図書館に関連する業界では良く知られている。そうした意味では、本校のような中等教育を担う学校では、その最初期である中1の段階からいかに読書の習慣や文化を作っていくかということが重要になる。不読率の上昇が注目を集める社会状況の中で、中1に対する読書指導は今後、全国的に取り組む課題となることが予想される。

(3)現場で感じた疑問という観点から

教科書をはじめ授業内で扱う教材を大切に思う教員は多い。学校の国語の授業で教材をしっかり読みこむことを教える教員もまた多い。それについてはもちろん稿者自身も異論はない。しかし「教科書を超えた」あるいは「授業を超えた」読書というものが、中等教育の国語科の実践現場でどれほど促されているだろうか。正直なところ授業でどれだけ一生懸命教えても、学習者が「授業で教材を読むだけ」にとどまってしまう、授業外の読書は促せないというのが一現場教員としての実感である。授業で読むことはトレーニングやガイドの場であって、本来は授業で得た知識や方法を、授業を超えた場面で活かしていかなければいけない。授業を超えた場面で学習者が継続的に読んでいけるように、伴走者のような形で継続的に読書を促す活動が重要であると稿者は考えるのである。

誤解なきように付け加えると、授業を超えた場面での読書活動を現場の教員が軽視しているということが言いたいのではない。多くの教員が、日常の場面でも学習者に本を読むことを願っているであろうし、また、本を読むことの意義を学習者に語ることもあるだろう。しかし多くの場合、そうした授業外の読書については学習者の〈主体性〉に委ねられることの方が多いのではないだろうか。ここで稿者が課題だと感じるのは、授業内での読むことの指導と、授業外で読むことを指導することの間に「指導の二面性」がないかということだ。つまり、教室における教材の読解指導も日常生活における読書指導も、どちらも学習指導として必要であるにも関わらず、「A は必要だから必ずやりなさい、B は必要だけど自分でやりなさい」という形で私たちは一貫性を欠いた指導を行っていないかということである。こうした課題は、かく言う稿者自身のこれまでの実践上の課題でもあった。こうした課題意識から、今回の単元を構想するに至ったのである。

読書指導における〈主体性〉とは、「読書するか/しないか」を学習者に委ねることではない。授業

から広がっていく読書や日常的な読書習慣を促進するのであれば、読書を継続的に行うことを前提として、「何を読むか」ということを学習者に委ねるべきであろう。「指導」とはとすると学習者の主体性を奪うように語られ、授業者の指導と学習者の主体性がトレードオフの関係として捉えられることがある。しかし、学習者の主体性を育むことと、授業者が何も指導しないことは同義ではない。現代の学習者は、動画やゲームをはじめとする茫漠としたコンテンツの海の中に身を浸している。稿者の考える読書指導は、そうしたコンテンツの海の中にいる学習者を読書へとフォーカシング(焦点化)、もしくはエンクロージング(囲い込み)をすることである。こうした指導を行わないと、学習者は茫漠としたコンテンツの波にのまれ、いとも容易く不読率に貢献してしまうだろう。

以上、3つの観点から今回の単元構想に至った背景を述べた。そこにもう一つの動機を付け足せば、本校で2024年から新図書館である「メディアライブラリー」が稼働し始めたことが挙げられる。新施設が稼働したこと、また、そうした新施設をオープンスクールで見学し、それに興味を抱いた児童が本校に入学したタイミングであったということも、読書指導を行うための追い風となったということもここに付け加えておこう。

3. 読書指導を内包した国語科単元学習の構想

次に単元学習の実際を見ていく。本稿は、実際に教育実習で行った単元構想について試案という形で示したい。今回は、全体的な単元について中心に記していくため、教材本文の詳細や評価の方法については、別稿に譲りたい。ちなみに、本校の中1は40名×6クラス(合計240名)の生徒数である。

さて、今回の試みを教育実習で行った理由は二つある。一つには、教育実習が年度当初の5月に行われるということである。年間を通しての読書指導の最初期の段階と教育実習との時期が重なったという現実的な理由から、教育実習での実施となった。もう一つには、この実践の汎用性を担保できる可能性があるということである。授業実践の発表は往々にして授業者の「名人芸披露」になりやすい。今回、稿者の考える授業設計を大学4年生の教育実習生が教壇の上で表現できれば、その実践は一定程度の汎用性や再現性が保証されるだろう。「私だからできる実践」ではなく、「誰にでもできる可能性のある実践」であるかどうかの確認として、教育実習は適した場であると考えた。以上二つの理由から今回教育実習でこの試みを実現させたが、教育実習生の視点から考えれば、「不読率の増加」という教育課題に対して教壇の授業を通して身をもって考える機会にもなっているだろう。

さて、本単元では「エッセイを書こう」と題して、最終的に朝日新聞社主催の「折々のことばコンテスト2025」に応募することをゴールに据えている。単元全体の目的としては「他者から投げかけられた言葉を自分の中で受けとめ、それを文章の形で言語化すること」であるが、その目的達成のために、エッセイコンテストの応募を目標としている。つまり、単元の目標をエッセイコンテストに据え、そのゴールを見据えて、そこに向けて全体の学習計画や教材内容を「逆向き設計」で考案している。言い方を変えれば、単元目標として一般のコンテストを援用している、とも言える。

単元全体の概要については【表2】に示した。授業内の活動としては、第一次として教材本文を二つ用意し、「読むこと」の授業を行った。教材本文はいずれも、他者から投げかけた言葉について自分の思いを綴った文章である。つまり、後の第二次、第三次においてエッセイを書くときの「範例」

となるような文章を選定している。

単元構想	表2
○第1次 読むこと(2時間) 教材 三宅香帆「本という他者」 (『それを読むたび思い出す』) 星野源「怒り」 (『いのちの車窓から』) →「他者のことば」を受けとめ、それが自身にとってどのような意味のあることなのかを事後的に振り返るエッセイを詳細に読む。 ○第2次 書くこと(2時間) →自分の過去の経験のなかで印象的だった「他者からのことば」を一つ取り上げ、それについて「具体的なエピソード」と「その言葉に対する自分の受けとめ」を文章の中に盛り込み、400字程度でまとめる。 ○第3次 書くこと②(1時間) →授業者からのコメントを読み、自身で構成をし直す。 「折々のことばコンテスト2025」(朝日新聞社主催)の応募に向けて、体裁をととのえる。	授業外の読書 授業前 →本単元に先行して、エッセイを自分で選び1冊読む。 授業期間 →授業実施期間に閉講して、エッセイを自分で選び1冊読む。 ※授業で読むエッセイ教材以外にも、最低2冊は授業外でエッセイについて触れている。

この単元において読書指導においては、授業実施に先行して1冊、授業実施と並行して1冊の読書課題を設定している。授業実施前の読書課題については、そもそも「エッセイ」というジャンルについて具体的なイメージが湧かない中学1年生に対して、エッセイとはどのようなものかを実体験してもらうための読書である。また、授業と並行してもう1冊の読書課題を設定している。これについては、自分が実際にエッセイを書くにあたって参考になる表現や構成、使用してみたい語彙などを書き留めるための読書である。それぞれに「読書プリント」と称して、「内容の要約」、「印象に残った言葉やフレーズ」、「表現の工夫」を書きとめるA4のプリントを用意し、記録させている。こうした記録用紙は、その後に行った別の単元でも使用しており、年間を通して読書の記録をファイルにためて、自身の読書の履歴が可視化できるようにしている。

本単元全体を俯瞰した時の「読書指導」の目的は、「読むこと」が「目的」になる読書だけではなく、「読むこと」が「手段」となる読書を意識しているということである。従来の読書指導とは、読むことそのものを楽しむということに重点が置かれることの方が多いだろう。しかし、本単元では「読むこと」が「目的」になる読書はもちろんのこと、「読むこと」が「手段」となる読書も意識した読書課題の設定をしているのである。言うなれば「書くために読む」という読書の仕方を学習者に提示しているのである。

4.まとめに代えて

これまで国語科単元学習の中に読書指導を位置づける学習の提案を行い、本校で2025年5月に行った単元の概要を示した。本稿を記している現在は、「書くこと」のジャンルを短歌・俳句、新聞投書などに広げ、それに応じた読書課題を提示している。そして、読書課題も年間で34冊を読むペースで中1の学習者には促している。その結果、短歌・俳句、新聞投書で多くの成果を残した。

また、年間の読書活動の一つの集大成として、紀伊國屋書店の梅田本店で中 1 の制作した POP の優秀作品 40 点を店頭展示していただくこととなった。今後も国語科の授業だけではなく、本校の中 2 での宿泊行事(和歌山)や中 3 での研修旅行(沖縄)等、学校全体の学習活動とも深く連携しながら、また「書くこと」とも深く連携しながら、読書活動を行っていきたい。年間全体の読書指導やそれと連動した学習活動については、別稿の機会を俟ちたい。

5.参考文献

・文部科学省 国立教育政策研究所「令和 7 年度 全国学力・学習状況調査 報告書・調査結果資料」<https://www.nier.go.jp/25chousakekkahoukoku/> ,2026 年 2 月 27 日

・公益財団法人 全国学校図書館協議会「第 70 回学校読書調査」

<https://www.j-sla.or.jp/material/research/dokusyotyouusa.html> ,2026 年 2 月 27 日

・株式会社ベネッセコーポレーション「小学生から高校生の 10 年にわたる追跡調査データから『読書』を読み解く『読書をしない』子どもは 10 年前と比べて 1.5 倍に増加 スマホ時間と読書時間は逆相関関係があり、読書 0 分の子は語彙力・読解力が低い傾向」

https://benesse.jp/berd/special/childedu/pdf/newsLetter/newsLetter_20251020.pdf ,2026 年 2 月 27 日

光村図書出版株式会社「第 4 回 子どもの「好き」に関するアンケート調査」

https://assets.mitsumura-tosho.co.jp/1117/4478/8145/release_20250415.pdf ,2026 年 2 月 27 日